君がいない

糸雨　冷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君がいない

【Ｎコード】
Ｎ１７３６ＢＡ

【作者名】
糸雨　冷

【あらすじ】
きみがいないきみがいないきみがいない
それだけで全ての意味がなくなる。

世界は、いらないものであふれている。
そしてきっと、神という存在がいたのならば、それにとってこの世に在る全ての人は、いらない存在なのだろう。

僕にとって、郁は全てだった。
あの微笑みだけが生きる糧で、あの声に名を呼ばれるときにこそ至福というものを感じた。
郁は、僕にとっての世界だった。
大げさだと・・・言うだろうか？
それでもそれは、僕にとっての真実であり、僕にとっての唯一だった。

「　こうき　」

優しい、柔らかい声で、郁(いく)は僕を呼ぶ。
穏やかで、暖かい、そんな声を郁はしていた。

僕は、郁だけが必要だった。
それでも世界にとって、郁はいらないものの一つでしかなかったようだ。
だって、郁がいなくなっても世界は変わらずに動いているもの。

「こーうーきっ」

声のほうに、振り返る。

もちろんそこに、郁はいない。

長い黒髪の、長身の男。

「呼宝(こほう)。」

ふりむけば憎憎しいほどの長身で、呼宝は小さな僕を見下ろしていた。

その身長差は考えるのが嫌になるほど大きくて、僕は呼宝と向き合うたびに首が痛くなる。

「郁は、来ないよ？」

呼宝の親切ぶって、わかりきっている痛い事実を指摘するとこ、僕は嫌いだった。

そしてそれを嫌がっているとわかっていながらやる呼宝は、本当に性格が悪いと思う。

「知ってる。それでも待っていたいんだ。」

僕がそういうと、呼宝は「あっそ。」と言って、どこかに消えていった。

僕が初めて郁に出会ったのは、小さな子供の頃だった。
あの頃僕は幼稚園生で、同い年である郁ももちろん幼稚園生だった。
もともと僕の母と郁の母が友人で、その二人が久しぶりに遊ぶとなったときに、子供たちもつれて遊ぼうとなったのが、初めての出逢いだ。
家が比較的近かったこともあり、僕と郁はすぐに仲良くなった。
そして年を経ていくうちに、異性である相手を意識するようになるのはたやすかった。

きっと郁が僕にとっての初恋で、きっとたぶん僕が郁にとっての初恋だったのだろう。

我が家の庭の、玄関が見える位置にいすを置いて、そこで毎日読書をするのが、僕の日課である。
昔は、郁が来るのを待ちながら、本を読んだものだった。

だけど郁は、もう来ない。

「こうき？」

甘みをおびた、優しい声が僕を呼ぶ。
僕の真っ黒の髪とは違う、色素の薄い茶色い猫っ毛が揺れる。
優しい声に似合う、その色彩。
髪によく似た茶色い瞳が、僕を移す。

「なんでもないよ。」

そういって僕が笑えば、郁も優しく微笑んだ。

月が、満ちても。
年が、変わっても。
僕が、大人に・・・なっても。

郁はもう、やってこない。
僕の名前を、呼んではくれない。

「こうき、どうしたの？」

郁が、僕の顔を覗き込む。
茶色い髪が、小さく揺れる。
ボーっとしていた僕は、近くに現れた郁の顔に驚き、大きく体を震わせる。
僕の黒髪が、大きく揺れる。

大げさに驚いた僕がおかしかったのか、郁は小さく声を上げて笑う。
郁は、かわいい。
そういうと郁は嬉しくないと言ってふくれるけど、それでもやはり郁は可愛いと思う。

郁といると、癒されていると感じる。
本来ならば、僕が郁にとっての癒しであるべきなのかもしれないが、それでも僕にとって、郁は癒しだった。
僕と郁が付き合いだしたのは、いつからだっただろうか？
出逢ってからずいぶんと経ってからだったのは間違いない。
想いを告げたのは、郁のほうだった。
暖かいその関係を壊したくなくて、ずっと言えずにいたのは僕のほうだった。
「終わらない恋の意味を、一緒に探しませんか？」
芝居がかった動作で、彼はそう言った。

僕・・・いいえ、私の長い髪を少しとって、郁は自分の指に絡める。
郁の肌は白くって、もちろんその指も白かったけど、やはり男の子だからか、その手は私の手よりずいぶんと大きく、ごつごつとしている。
「郁、楽しい？」

掬っては絡め、落とす。
そんなことをして私の髪で遊ぶ郁を、私は不思議そうな目で見ていた。

私の髪はひどくまっすぐで、郁の手を簡単にすり抜ける。
その様はどこか面白く、そしてどこか物悲しい。

「香姫(こうき)の髪は、綺麗だね。」

そう言って笑う郁のほうが、私なんかよりずっと綺麗だ。
郁はいつも私のことを綺麗と褒めるけれど、郁のほうが・・・ずっと綺麗。

優しい優しい、綺麗な心を持った郁。
私の・・・愛した人。

しとしとと、静かに雨が、降る。
ただでさえこの頃は冷え込んで仕方がないのに、その日は特に寒かった。

雨で気温が下がったからか、心にぽっかり開いた穴のせいか。

それともばっさりと切り落とした、長かった髪のせいか。

僕の背中を覆っていた長い髪は、もうない。
きっと今頃、灰になってる。
郁と、一緒に。

どれだけ雨が降っていても、その灰色の煙はまっすぐ空へと上っていく。

郁を、連れて。
私を・・・僕を、置いて。

手を伸ばしても届かない。
きっとずっと届かない。

郁は、僕を置いて死んでしまった。
だからもう・・・いらない。
長かった髪も、”私”という女である存在も、香姫を形作る、全てのものが。

「もう・・・いいよね、郁?」

貴方の元に、逝きたい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1736ba/

君がいない

2012年1月4日13時53分発行